

マンソン氏リグラ状裂頭条虫の皮下寄生の1例

高知県伊野町仁淀病院外科 (院長 吉野 位)

吉 野 位・高 橋 宏

原稿受付 昭和38年10月11日

Subcutaneous Tumor Formation by Sparganum Mansoni in Man

by

TADASHI YOSHINO and HIROSHI TAKAHASHI.

From the Surgical Division of Niyodo Hospital. Ino, Kōchi

A case of subcutaneous tumor formation by sparganum mansoni found in Kochi Prefecture is reported. The case is considered as the first report in the prefecture.

The sparganum or proceroid larva of diphyllbothrium mansoni will develop in man following indigestion, usually in drinking water, of a cyclops bearing the proceroid larva. The proceroid larva contained in frogfresh or chicken is also capable of invading human tissues.

The most probable route of infection in the present case is indigestion of water and frog fresh in Siberia, but water of Niyodo River in Kochi Prefecture could also be causative.

結 言

本邦に於ける、マンソン氏リグラ状裂頭条虫の幼虫の人体寄生例は既に150余例が報告されている。その約半数は京阪地方で、その他は東京地方近畿地方が多く四国に於いては1959年を以て、兼松の1例以外の報告を見ない。吾々は最近高知県で本条虫皮下寄生の1例を経験したのでここに報告する。

症 例

患 者 土〇盛〇, 占, 36才, 警察官
住 所 高知県高岡郡日高村岩目地
初 診 昭和35年2月8日
主 訴 左下腹部及び左大腿における無痛性腫瘍
現病歴 昭和33年5月頃右下腹部に指頭大無痛性腫瘍を生じた。大きさ及び部位の変動はなかつた。3ヵ月後切開剔出されたが本態不明といわれた。その後半年位して、左大腿中央前内側に同様の腫瘍を生じ、そ

の後大きさの変化、位置の移動もなかつた。2ヵ月前左下腹部に同様の腫瘍のあるのに気付いた。之は体の屈伸時多少の痛みがあつた。腫瘍の移動はなかつたが、大きさは一時多少大きくなり、その後少し小さくなつた。

既往歴 既往に特別の疾患はない。戦後、シベリヤで蛙を焼いて食べた事あり、又当時井戸水や水溜りの水も飲んだ。3年前仁淀川上流に勤務し仁淀川の水を常時使用。炊事も河水を使い、河の生水を飲む事もあつた。

家族歴 特記すべき疾患はない。

現 症 体格中等大、栄養可、脈搏正整、体温平熱、胸腹部臓器に異常を認めない。左下腹部で臍～腸骨前上棘のほぼ中間、腹直筋の外縁の近くの皮下に示指頭大、弾性比較的軟の腫瘍があり、被覆皮膚は正常で腫瘍に対して移動性がある。腫瘍は腹直筋膜に対し余り移動しない。境界比較的鋭。腹筋を緊張させると腫瘍は明らかになる。圧痛は殆どない。

左大腿中央前内側に示指頭大の皮下腫瘍を認め、前腫瘍同様、皮膚正常で移動性あり、腫瘍境界鋭、表面粗大凹凸あり、弾性比較的硬、筋膜に対する移動性は少ない、圧痛なし。

血液検査所見

8/Ⅱ 赤血球数 473×10^4 、血色素90%（ザーリー）、白血球数9600、白血球分類、好酸球1% 中性球桿状核15% 分葉核32% 淋巴球37% 単球13% 好塩球2%

20/Ⅱ 赤血球数 150×10^4 、血色素88%（ザーリー）白血球数11200、白血球分類 好酸球2% 中性球桿状核11% 分葉核54% 淋巴球22% 単球11% 好塩球0%

肺ジストマ体抗原による皮内反応陰性。

臨床診断 良性腫瘍、皮下寄生虫の疑

手術 3月19日 腰麻

腹部腫瘍 腫瘍直上部で皮膚切開するに、腫瘍は左腹直筋鞘前葉外でその外縁に近く位炎症浸潤を来した脂肪塊状示指頭大で、周囲脂肪組織との境界稍々不明。腫瘍を周囲より剝離する際に灰白色濃厚膿汁状物を発見、之を摘出した所が紐状に伸展したので之を生理食塩水中に保存し、残余腫瘍を剔出し創を縫合した。

左大腿部腫瘍も筋膜外皮下脂肪深部にあり腫瘍境内に同様の紐状物を発見した。

虫体所見 両腫瘍内より摘出した紐状物は生理食塩水内でルーペで観察すると盛んに蠕動運動を行う扁平紐状灰白色の虫体で、生時は伸縮するので判然としなないが、腹部より摘出した虫体は長さ約1.8cm 巾約1mm 大腿部より発見したものは長さ2.8cm 巾2mmの扁平細長で紐状を呈し虫体の周囲には輪状に無数の横皺を有しているが体節の形成なく体縁は鋸歯状を呈している。頭部は扁平形、尾部は扁平な扇形を呈しマンソン条虫の特徴を有していた。

考 察

マンソン氏リグラ状裂頭条虫の人体寄生例については1831年 Scheube が京都において馬丁の尿道口より排出された虫体を発見し、之を報告したのが最初である。他方 Manson は1882年廈門において同様の虫体を発見し Cobbold に送った所同氏はこれを Ligula と見なし Ligula mansonii として記載した。本症は東洋殊に日本中国に多くその他朝鮮、台湾、馬來、安南を始めアメリカ、アフリカ等からも若干の報告があり、その

数は既に150例以上に達している。本邦においては京阪地方が70余例でもつとも多く、ついで東京都の6例、愛知、三重の3例、新潟、兵庫、静岡、福岡、群馬、栃木、長野、富山、岐阜、和歌山、滋賀、香川、熊本、宮城、山形、岡山、鳥取、徳島の各県においてその発生をみるが高知県における本幼虫の人体寄生例についてはいまだ報告がなく本例が最初の症例と思う。

本幼虫は最も多く皮下組織に寄生し就中、大腿部、下腹部の腹壁、鼠径部、胸壁等に多く、その他陰部、四肢にも見られる。又腹腔、胸腔内、呼吸器道、心外膜、尿道、眼部等の臓器に見られた例も報告されている。一個体に見られる本幼虫の寄生数は通常一条で稀に10数条及至数条発見された例がある。又本幼虫は屢々皮下組織内を移動し例えば下腹部より大腿部へ、大腿部より陰囊へと移動した報告もある。本幼虫は中年の男子に多く、女子には稀である。診断は一般に困難であり岩田は顎口虫症との鑑別を強調している。

本幼虫の終宿主は主として犬及び猫であるがその他虎や豹等にも寄生例を見る。

本条虫の發育には第一第二の中間宿主を必要とし第一中間宿主はケンミジンコでこの体内でプロセルコイドと称する幼虫型に發育する。第二中間宿主は人間を含む、哺乳類、爬虫類、鳥類、両棲類で通常蛙、蛇、家鴉、鴨、豚、猫、鼠等が多い。これらの第二中間宿主体内ではプロセルコイドと呼ばれる紐状の幼虫でこれが固有宿主に摂取されて初めて成虫に發育する。しかし不適当な宿主に入ればその消化管壁を穿通して各部に至りプロセルコイドのまま長く寄生しうる。従つて体内への感染には2つの経路が考えられる。即ち一つは第一中間宿主であるケンミジンコを含有した生水の飲用であり、他の一つは第二中間宿主例えばプロセルコイド寄生の蛙、家鴉、鴨等の生肉を或は不完全な料理の下に摂取した場合である。この他奥村は第1第2中間宿主の間に尚一個の中間宿主が例えば魚類、昆虫があつてこれらを人類が摂取する事によつて感染すると考える方が自然だとのべている。

本症例の感染経路としてはその既往歴からシベリヤで摂取した蛙及び生水、高知県の仁淀川上流で摂取した生水等が考えられるが明らかではない。

結 語

1) 最近我々は高知県でマンソン氏リグラ状裂頭条虫の皮下寄生例を経験したので報告した。これは本県

における最初の症例であると思う。(2) 本症の感染経路としてはケンミジンコを含有した生水の飲用と、プロセルコイドの寄生する蛙、家鶏等の生肉の摂取によると述べられている。(3) 本症例の感染経路はその既往歴にシベリヤで摂取した蛙及び生水、高知県の仁淀川上流で飲用した生水が考えられるが明らかではない。

拙筆するに当り御校閲賜った恩師京都大学外科第2講座木村忠司教授に深謝します。

文 献

- 1) 阿部弘毅：右大腿より発見されたマンソン条虫症の一例，日外函，28, 24 62, 昭34.
- 2) 滝原哲一他：胸囲結核と誤診された両側胸壁に皮下腫瘍を形成したマンソン孤虫症の一例，外科診療，1, 241, 昭34.
- 3) 呉 健：リグラ状裂頭条虫，内科書下巻，623, 昭32.
- 4) 伊崎周介：Manson 孤虫皮下寄生の一例，米子医学雑誌，8, 82, 昭32.
- 5) 三島好雄：成人の腹直筋内に発見されたマンソン条虫，臨床外科，11, 861, 昭32.
- 6) 高崎剛男：マンソン裂頭条虫に関する研究，昭和医学雑誌，16, 528, 昭32.
- 7) 岡部浩洋，松瀬幹也：マンソン孤虫症の免疫学的研究，久留米医学雑誌，20, 7, 907, 昭32.
- 8) 内山淳夫：リグラ状幼裂頭条虫寄生による腹壁腫瘍形成，久留米医学雑誌，19, 1521, 昭31.
- 9) 岩田達男：リグラ状幼裂頭条虫の人体寄生による腫瘍形成，外科 17, 890, 昭30.
- 10) 原田直彦：岐阜県におけるマンソン孤虫症，寄生虫学雑誌，3, 120, 昭29.
- 11) 中野 拓，樋口成幸：リグラ状裂頭条虫症について，皮膚と泌尿，13, 3, 207, 昭26.
- 12) 斉藤 正：リグラ状幼裂頭条虫による腹壁腫瘍の1症例，外科，5, 974, 昭16.
- 13) 田北周平：リグラ状裂頭条虫穿孔による腹腔内所見，日本臨床外科医会雑誌，5, 318, 昭16.
- 14) 橋本尚之：満州に於けるマンソン氏幼虫症の1例，外科，5, 772, 昭16.
- 15) 橋本義雄：外科領域より観たる寄生虫症（特に最近経験せるマンソン氏裂頭条虫幼虫副辜丸内寄生例）に就て，日本外科学会雑誌，41, 1400, 昭16.
- 16) 高田 昇：リグラ状裂頭条虫に起因する腹腔内出血の1例，外科，4, 177, 昭15.
- 17) 筒井肇他：人体右直腹筋内より摘出せるリグラ状裂頭条虫の臨床的観察並に種名について，東京医事新誌，2714, 9, 昭6.
- 18) 小林英一：マンソン裂頭条虫のプロセルコイドの第2中間宿主及び人体への感染経路に関する実験的研究，東京医事新誌，2695, 2211, 昭5.